史傳

江馬細香女史の詩（其一）

小林雨峰

予昨夏美濃に遊び、岐阜、大垣を過ぎ、養老公園に入り、元正御宇の孝子を思ひ、一夜大垣に寓す、竊かに思ふ、大垣は曾つて江馬細香女史を出せしところと人に就て之を聞く、甚だ其の詳を得るに苦しみ、歸京、偶々『湘夢遺稿』を繙き、女史の詩才、巾幗者流中にありて、一大頭角を現はすものあるを察し、書架の雜筆を探りて、聊か女史の小傳をものして、是を諸姉に紹介するとなしぬ、

顧ふに近世閨秀文士の名、世々漸く出でゝ、小說に和歌に文事を談ずるもの日に月に多し、世運の進歩また舊日の比にあらず、然れども、かゝる閨秀作家のうちにありても、淫靡浮華なる文字を弄して、得意滿面の色あるか、然らざれば悖倫敗德の事績を驢列して、社會の眞相を描きたりとなすの輩のみ、其の和歌を詠じて、風敎を助け、文詞を以て一代を謠歌するが如きものに至りては寥々として見るべきなし、宜なり、ローラント夫人や、シュライネル夫人、エリオット夫人の如き閨秀文士の出づるなきをを、吾人の細香女史の詩を紹介する所以、決して偶爾にあらざるなり、女史羞し慷慨氣節を負うて、國事に奔走し、常に志士と交りて終生人に嫁せず、好んで墨竹を書きまた詩を善くす、吾人今其の遺稿を讀むにあたりて、

面影髣髴として窺ふに足るものあり

梁川星巖曾つて女史に贈るの詩に云ふ、

暈碧裁紅簇異葩。醉吟破費萬箋霞。座間別有靈香迸。一朶西天稱意花。翻譯各義集須曼那、此云菩攝意、又云稱意花其色黃白、而極香、須曼女生于曼花中。

瀟灑風流賽仲姬。直竿放筆墨淋漓。莫教吾衍題詩句。不免朱口倒好嬉。吾衍字子行、杭人、眇一目嘗作一小印、日好嬉子、仲姬書傳至于行、爲題詩後、倒用此印、他日文敏見之、罵曰、簡瞎子、他道好嬉子耳。

この詩、梁翁、が實に、太古、士錦、實甫等の諸士と、柏淵純甫爽氣樓に集り、賦して一は女史に贈り、一は實甫に示せしものなりと云ふ、以て文人志士と交遊せしの狀を見る可し、

案ずるに、嘉永、文久の際、海內騷擾を極めて憂國の士、皆劍を按じて起ち、山陽、星巖の徒、或は史に托し、或は文に寓し、或は詩に寄せ、以て憂國の元氣を發揚す、女史實に此の際に生れて久しく山陽に學び、また墨竹の技を玉澣和尙に學び、長して諸方憂國の士と往來す、後藤機（山陽の行狀をも誌せし人）の撰せし墓誌によれば、

女史の諱は袁、湘夢と號す、細香は其の字なり江馬氏、蘭濟翁の第二子なり、文久元年、辛酉九月四日沒す、享年七十五、禪桂寺に葬る、女史人となり、篤實溫雅、卓識あり、父に事へて孝、故ありて笄せず、筆硯自から娛む、又慨然憂國の氣あり、鬚眉丈夫をして、愧色あらしむ、嘗つて京師吉田袖蘭女史と共に江を下る、余之を導て、家岳篠崎翁を見る、既にして翁之を目送して曰く眞女史なり、若し夫れ袖蘭は則ち凡而已と、銘に曰く、（墓誌は元漢文なりしも今讀むものゝ爲めに訓解せり、）

畫竹嬌那。畫山峻峭。女而不婦。此是小照。

と黒竹を愛するが如く、勁直の質、峻峭の氣、自から見るを得べし、江馬蘭齊と云へるは、大垣藩の醫にして、名は春琢仙子樓と號す、通稱は德仲安政三年十月十一日歿し、子孫今大垣にありて、尙父の業を嗣げりと傳ふ、

女史の逸事には往々人口に膾炙せるものあり、曾つて、『日本』新聞に其の性行を記せしものありしと覺にしが今記臆に存するものなし、たゞ左に錄する一節の如きは聊か、今日の女學生など云ふものにとりては龜鑑とするに足るべきか、

『古今雅俗石亭畫談』に云ふ、畫は竹洞に學び、又梅逸に往來して畫名高かりしが、年若き頃よりして、粉華を事とせず、綾羅を用ゐず、曾つて京師に上り、梅逸の家に宿す、其妻怪みて問て曰く

女史こゝに來る日未だ幾何ならず、然るに其結ぶところの帶、破れて裏を露はすは如何、細香答へて曰く、褻帶は發途の際既に破れたり、然れども繕綴を加へず、直ちに京に上る、其破れたるは素來のみと、

其の裝飾の爲めに意を用ゐざる事、此くの如し次にこは、『日本』新聞にもかゝげありしをと覺にたりしが、かの墓誌中にもあるが如く、女史は終生嫁せざりしと云へるをにつき、畫談は左の如きをを云へり、

賴山陽、曾つて、江馬の家に寓し、細香の才學あるを知りて聘せんと欲す、細香常に以爲らく、萬人に卓越せる者に非れば醮せずと、是時山陽の伎倆未だ著はれず、故に辭して應せず、後山陽の名世に顯はるゝに及びて細香耻ぢ且つ悔て、終身

他に嫁せず云云

山陽との關係よりして終生嫁せざりしの一事は頗ぶる議すべきものありと雖も、また平生の抱負を考察し、爲めに、後年山陽の盛名あるをさゝへて恥悔せしの如きはやゝ人意を強うするに足るの美談にあらずや、今の滔々たる女流中、女史の如き、意氣、節操、を持する輩幾くかある、予は左の自述の詩を讀むで、感甚だ堪にざるものあり、

三從總欠一生涯。漸逐衰顏益放懷。擬試畫毫裂羅帶、爲粧瓢口卸銀釵。吟題洗雨蕉箋破。塗抹書空雁字排。唯恐人間疎嬾婦。强將風月做吾儕

結末二句の如きは自から風月に耽るの本意にあらざるを洩らしたるものならざらんや。（未完）

黑澤登幾子（第二卷第十二號の續き）

下村三四吉

登幾子が國事を憂へ藩主の寃を縷述せる長歌はかくて、畏くも　叡覽を經るに至りぬ。實にその歌中にいへるが如く、『野末に匂ふ梅が香を天津空まで傳へあげ』彼が初志を貫徹しけり。是れ必竟その身を顧みざる熱誠と和歌の德とによれるなり雨雪の厄風霜の苦に耐へて、芳香天地を薰ずる梅花は、採て以て登幾女の清操に比すべし。

既にして、登幾子は、京都を出で、岩清水社に謁でて祈請をこらし、それより、淀川を下りて大坂に着き、また讃岐に渡り、琴平宮その他に參詣し、再び大坂に歸航し、一商家に投宿せり。この行は、餘波に過ぎざれども、登幾女が用意の周到なりしことを見るに足らん。蓋し、幕府の偵察甚